

持続可能な開発のための教育円卓会議

平成30年2月21日（水）

持続可能な開発のための教育円卓会議 第4回

1. 開催日時 平成30年2月21日(水) 10:00~12:00

2. 開催場所 三田共用会議所 大会議室

3. 出席者

及川 幸彦 議長
阿部 治 委員
飯田 貴也 委員
岡本 弥彦 委員
上條 直美 委員
川上 千春 委員
瀬尾 隆史氏(川嶋委員代理)
佐藤 真久 委員
篠塚 肇 委員
諏訪 哲郎 委員
辰野 まどか 委員
棚橋 乾 委員
塚本 直也 委員
手島 利夫 委員
朽原 克彦 委員
仁科 俊彦 委員
長谷川 知子 委員
安田 昌則 委員

環境省

総合環境政策統括官
大臣官房環境経済課環境教育推進室長
大臣官房環境経済課環境教育推進室室長補佐

文部科学省

国際統括官
国際戦略企画官
国際統括官補佐

4. 議 事

1 開会

2 議題

1. ESD に関連する最近の取組について（報告）

- ① 関係省庁の取り組みについて
- ② ESD 推進ネットワークについて
- ③ 「ESD 推進の手引」の改訂について

2. ESD の SDGs への貢献について（情報交換）

- ① 事例紹介
 - 1) 手島委員（学校）
 - 2) 安田委員（地域）
 - 3) 長谷川委員（経済界）
 - 4) 阿部委員（環境）
 - 5) 上條委員（国際協力）

② 意見交換

3. その他

3 閉会

5. 配付資料

- 資料 1－①－1 平成 29 年度 文部科学省 ESD 関連施策実施状況
- 資料 1－①－2 平成 30 年度 文部科学省 ESD 関係予算（案）
- 資料 1－①－3 平成 29 年度 環境省 ESD 関連施策実施状況
- 資料 1－①－4 平成 30 年度 環境省 ESD 関係予算（案）
- 資料 1－② ESD 推進ネットワークについて
- 資料 1－③ 『ESD(持続可能な開発のための教育)推進の手引』改訂について
- 資料 2－①－1 ESD の SDGs への貢献について(手島委員)
- 資料 2－①－2 SDGs 推進委員会発言要旨（手島委員）
- 資料 2－② 大牟田版 Sustainable Development Goals（安田委員）
- 資料 2－③－1 企業行動憲章（長谷川委員）
- 資料 2－③－2 企業行動憲章および同実行の手引きについて（長谷川委員）
- 資料 2－④－1 国際協力 NGO とつながる国際理解教育の授業（上條委員）
- 資料 2－④－2 DEAR の新教材 スマホから考える世界・私・SDGs（上條委員）

- 参考1 持続可能な開発のための教育円卓会議の開催について
- 参考2 第五次環境基本計画（案）の概要
- 参考3 森里川海でもっと遊ぼう！～読本『森里川海が大好き！』がつなげる
自然体験の輪～
- 参考4 持続可能な開発のための教育（ESD）の更なる推進に向けて～学校
等でESDを実践されている皆様へ 日本ユネスコ国内委員会教育小
委員会からのメッセージ～

10時00分開会

- 及川議長 皆さん、おはようございます。本日は御多用のところお集まりいただき、大変ありがとうございます。

定刻になりましたので、ただいまから持続可能な開発のための教育円卓会議を開始いたします。

初めに、事務局に人事異動がございましたので、御紹介をお願いいたします。

- 鈴木国際統括官補佐 文部科学省でございますけれども、4月1日付で国際統括官に川端和明が着任しております。

- 川端国際統括官 川端です。よろしくをお願いいたします。

- 田代環境教育推進室室長補佐 環境省でございます。昨年7月14日付で総合環境政策統括官として中井徳太郎が着任しております。なお、中井は本日、公務により途中からの参加となります。閉会の際に改めて御挨拶の時間を頂ければと思います。

- 永見環境教育推進室長 環境教育推進室長の永見でございます。これまで環境教育推進室は総合環境政策局の下にございましたが、組織変更で大臣官房の下に入りました。その長として総合環境政策統括官がいるという形になりました。併せて御報告さしあげます。

- 及川議長 ありがとうございます。

それでは、続きまして、事務局の文部科学省、川端国際統括官より御挨拶をお願いいたします。

- 川端国際統括官 川端です。昨年4月に着任しております。平成29年度のESD円卓会議の開催に当たりまして、一言御挨拶を申し上げます。お寒い中、御参集賜りまして、誠にありがとうございます。

文科省では、昨年9月に、日本ユネスコ国内委員会教育小委員会で御議論いただきまして、学校等でESDを実践していただける方々に対してメッセージを出させていたいただいています。ESDを引き続き推進していくということがSDGsの達成に直接、間接的に貢献するということが、それから、ESDが新しい学習指導要領の基盤となる理念として組み込まれていることなどを文科省としても広く皆様にお伝えしたいということで、尽力しているところです。本日の参考資料にも配付しておりますので、後ほど是非ごらんいただければと思います。

また、昨年12月にはユネスコスクール全国大会／ESD研究大会を大牟田市にて開催いたしまして、900名以上の多くの方々にご出席を賜りました。今回は、本日お見えの安田委員をはじめ大牟田市の教育委員会の皆様にお世話になりました。初めて学校での公開授業も行いまして、SDGsも見据えた大牟田のESDの先進的な取組を参加者が学ぶ非常に良い機会になったと思いますし、ユネスコの本部からもユネスコスクー

ル担当課長のデツツェル氏に御出席、御講演を賜りました。

昨年末に発表されましたジャパンSDGsアワードの表彰式が官邸で行われましたが、このアワードでもESDに長い間取り組んでこられた、手島委員の八名川小学校、それから、岡山大学、北九州市などの団体がパートナーシップ賞を受けられました。これも長い間ESDに取り組んでこられたことがSDGsの達成に貢献するすぐれた実践だということをお話しているものであります。

世界に目を向けますと、御存じのとおり、ESDに関するGAP、グローバル・アクション・プログラムが2019年に区切りを迎えます。ユネスコ本部ではその後継のアジェンダの策定に向けて準備を行っているというふうに聞いているところです。今年7月にはバンコクで、全ユネスコ加盟国を対象としたESDの将来に関する協議が行われる予定です。GAPの後のESDを考えるに当たっても、ESDが持続可能な社会づくりの担い手の育成を通じて、SDGsの全てのゴールの達成の鍵となるというようなことが重要な考え方の柱になると思っております。

本日はこれまで皆様方が実践されてこられました取組を、特にSDGsとの関連から振り返っていただきまして、ポストGAPを見据えた今後のESDの更なる発展について活発な御議論が行われることを期待しております。

最後になりますが、この円卓会議の開催に当たりまして、関係の皆様のお力添えに心より感謝申し上げます。本日の議論が実のあるものとなり、今後の活動が更に活性化することを祈念いたしまして、挨拶とさせていただきます。よろしくお願いいたします。

- 及川議長 ありがとうございます。

それでは、今年の会議開催以降、新たにメンバーになられた方もおられますので、まず初めに改めて事務局よりメンバーの皆様の御紹介をお願いします。

- 鈴木国際統括官補佐 五十音順で御紹介を申し上げます。

阿部治委員でいらっしゃいます。

- 阿部委員 おはようございます。

- 鈴木国際統括官補佐 飯田貴也委員でいらっしゃいます。

- 飯田委員 よろしくお願いたします。

- 鈴木国際統括官補佐 今井清委員が本日は御欠席でいらっしゃいます。

及川幸彦委員でいらっしゃいます。議長をお願いしております。

- 及川議長 よろしくお願いたします。

- 鈴木国際統括官補佐 岡本弥彦委員でいらっしゃいます。

- 岡本委員 よろしくお願いたします。

- 鈴木国際統括官補佐 それから、小川雅由委員、加藤久雄委員が本日は御欠席でいらっしゃいます。

上條直美委員でいらっしゃいます。

- 上條委員 おはようございます。
- 鈴木国際統括官補佐 川上千春委員でいらっしゃいます。
- 川上委員 おはようございます。
- 鈴木国際統括官補佐 川嶋直委員は本日御欠席でいらっしゃいますが、代理で瀬尾隆史様に御出席いただいております。
- 瀬尾委員代理 瀬尾でございます。よろしくお願いいたします。
- 鈴木国際統括官補佐 川村雄司委員は御欠席でいらっしゃいます。

佐藤真久委員でいらっしゃいます。

- 佐藤委員 おはようございます。よろしくお願いいたします。
- 鈴木国際統括官補佐 篠塚肇委員でいらっしゃいます。
- 篠塚委員 よろしく願いいたします。
- 鈴木国際統括官補佐 柴尾智子委員が本日御欠席でいらっしゃいます。

諏訪哲郎委員でいらっしゃいます。

- 諏訪委員 よろしく願いします。
- 鈴木国際統括官補佐 辰野まどか委員でいらっしゃいます。
- 辰野委員 よろしく願いいたします。
- 鈴木国際統括官補佐 棚橋乾委員でいらっしゃいます。
- 棚橋委員 よろしく願いします。
- 鈴木国際統括官補佐 塚本直也委員でいらっしゃいます。
- 塚本委員 よろしく願い申し上げます。
- 鈴木国際統括官補佐 手島利夫委員でいらっしゃいます。
- 手島委員 おはようございます。
- 鈴木国際統括官補佐 朽原克彦委員でいらっしゃいます。
- 朽原委員 よろしく願いいたします。
- 鈴木国際統括官補佐 仁科俊彦委員でいらっしゃいます。
- 仁科委員 よろしく願いします。
- 鈴木国際統括官補佐 長谷川知子委員でいらっしゃいます。
- 長谷川委員 よろしく願いします。
- 鈴木国際統括官補佐 安田昌則委員でいらっしゃいます。
- 安田委員 よろしく願いします。
- 鈴木国際統括官補佐 以上でございます。
- 及川議長 ありがとうございました。

本日の配付資料につきましては議事次第のとおりでございます。時間の関係上一つ一つ確認はしませんが、もし落丁等がございましたらば議事の途中でも事務局にお知

らせいただければと思います。

それでは、早速、「議題 1. ESD に関する最近の取組について」に入りたいと思います。

まずは関係省庁の取組について、事務局より御紹介をお願いします。

- 鈴木国際統括官補佐 文部科学省から御説明をさせていただきます。資料 1-①-1 と 1-①-2 を使いながらお話をさせていただきます。

まず資料 1-①-1 でございますけれども、今年度の ESD 関連施策の取組の状況について、かいつまんで御報告をいたします。まずユネスコスクールを通じた ESD の推進の関係におきましては、先ほど川端から御紹介いたしましたとおり、全国大会を大牟田市で開催いたしましたこと、そのほかに手引を活用した研修、重点校形成事業等を引き続き実施しております。

ユースに関連しましても、今年度もユース・コンファレンス、そしてそれに続くフォローアップ会合等を実施しまして、ネットワーキングに努めております。

それから 2 つ目の括弧のグローバル人材の育成に向けた ESD の推進事業は、多様なステークホルダーの皆様の協働による ESD の推進ということで、地域を単位とした ESD コンソーシアムを形成していただく事業でございます。今年度は 8 のコンソーシアムに活動いただきましたが、今年度は全国の活動報告会を公開の形で実施したところは新しいところかと思えます。

そのほか、ESD に関する信託基金の拠出、ユネスコにおける ESD 賞への推薦等々を行っておりますが、最後のところ、広報資料の改訂につきましては、いわゆる緑色のパンフレット、オレンジ色のパンフレット、長く使ってきたものでございますけれども、こちらの改訂を実施いたしております。

続きまして、来年度の事業予定、予算案について御説明を申し上げます。1-①-2 でございます。来年度の予算につきましては、文部科学省国際統括官付では、SDGs の達成に資する国内外のユネスコ活動の充実のための予算要求をいたしました。ESD は人材育成を通じてこれに貢献するものということで、この予算全体の一環となっております。

一番上の日本／ユネスコパートナーシップ事業、これは委託の形で、先ほど申し上げましたユネスコスクール等を中心とする ESD の推進に関する事業を実施するものでございます。

2 番目の ESD グローバル人材の育成に向けた ESD の推進は、ESD コンソーシアムの事業でございますが、これまで地域単位でコンソーシアムを実施してきた部分に加えまして、新たに、コンソーシアムのような多様な参加者が協働する形でより高度な ESD に取り組む事業を実施していただける部分を新たに設けてございます。

3 番目のユネスコ活動の助成につきましては、これまでユネスコの事業分野におけ

る開発協力の事業を助成してきたものですが、こちら SDGs の達成に具体的に貢献する事業を支援するものとしたしました。この点で ESD とも関連がこれから出てくるかと思っております。

下の2つは、どちらもユネスコへの拠出金でございます。上の GAP の信託基金はユネスコの本部、それから、アジア太平洋教育協力信託基金はユネスコのバンコク事務所を通じて、様々な事業を実施していただくための信託基金でございます。

文部科学省からは以上でございます。

- 及川議長 ありがとうございます。

では、環境省よりお願いします。

- 永見環境教育推進室長 環境省環境教育推進室長でございます。資料1-①-3をごらんください。29年度は後ほど御報告さしあげます ESD センターの業務以外は例年どおりの業務となっております。最初はセンターのことを書いてありますが、次の丸ですけれども、ホームページにおいて情報提供いたしております。また、次の丸ですけれども、環境教育拠点、モデル事業を動物園、水族館、市民公園、環境学習センターなど、身近な地域コミュニティにおいて、ESD の視点を踏まえて、多様な主体が連携しながら、大人、子供の主体的・協働的な学びを促進するというモデル事業を創出していこうということで、全国で、数え方にもよりますが、20か所程度のモデル事業を行っております。また、どちらかというと環境教育という看板で掲げている形が多いんですけれども、文部科学省との連携により小中学校等の教員などを対象として ESD の視点を踏まえたカリキュラムデザイン力、実践力を向上させる研修会というのを継続的に行っております。

また、次の丸ですけれども、ESD の観点から環境活動を行う高校生、大学生の社会参加を促進するための全国ユース環境活動発表大会というものを開催して、各地から活動を報告してもらうために集まっていたいて、最終的には優秀なものを表彰するというものを行っております。

また、企業の経営の中での研修であるとかというものの表彰制度というものも行ってあります。

来年度につきましては、今年度と基本的には同様で、若干予算が減ってしまっているところがございます。今年度、紙には書いてないんですけれども、現在、環境教育等促進法の施行状況の検討というのをしております。ここで、来月にも報告書と、法律の基本方針の改定案というのを専門家会議の中で、この中でも棚橋先生などにお世話になっておりますけれども、基本方針の改定案というのを取りまとめたいただければということで準備をしております。これをきっかけに新しい取組も来年度、再来年度、増やしていきたいと思っております。まだまとまっていないので、ここで詳細は御報告できないことをおわび申し上げます。以上です。

- 及川議長 ありがとうございます。

続きまして、今お話に出てきました ESD 推進ネットワークについて環境省よりお願いします。

- 永見環境教育推進室長 引き続き永見から御報告させていただきます。資料 1-②をごらんください。既に最初の方は御承知のところかと思えますけれども、ESD 推進ネットワークについてということで、ESD のネットワークを作っていくためには様々な事業を文部科学省、環境省も含めて、行っているところではございますけれども、その核としてセンターを作っているというものがございます。ESD 推進ネットワークの構築に向けた議論というところで、そこを御紹介しております。1 ページのところですけれども、既に御承知のとおり、GAP の開始が正式発表されてから、ESD 国内実施計画を皆さんにも御協力いただいて、関係省庁で策定しました。その中でセンターを整備していくということが記載されております。

次のページに参りますと、センターを核として推進ネットワークを作っていくということで、4つの「はたらき」、3つの「つなぐ」ということで、情報・実践の共有、ESD 支援体制の整備、学び合いの促進、人材の育成といったようなテーマをつなぐ、地域を越えてつなぐ、国際的な情報をつなぐということで、ネットワークを作っていくということで、そのページの右側になりますけれども、地方 ESD 活動支援センターと、ESD 活動支援センター、全国センターと呼んでおりますけれども、全国のセンターをハブとして、また、地域に ESD 活動推進拠点という地方センターと協働していただけるパートナーとして拠点となっただけの方も募集して、ネットワークを作っていくという形になっております。

その全国センター、3 ページでございますけれども、活動は割と縁の下の力持ち的な仕事が多いんですけれども、一つ御紹介いたしますと、全国フォーラムというのを基本的には毎年開催していこうということで実施しております。今年度は11月に立教大学で行いました。260人ほど集まりまして、3ページのプログラム構成に書いてあるとおり、基調講演を行っていただいたり、あとセッション3というところでは、文部科学省、環境省はもとより、外務省、消費者庁からも御参加いただいて、施策の紹介などを行っていただきました。また、セッション4で、分科会ということで、学校での取組方であるとか、公的施設での取組方、あと、森里川海上下流連携だとかを中心とした取組方について、グッドプラクティスの紹介から議論をしていくというようなことをいたしております。

4 ページに参りますと、今年度大きなこととしては、地方のセンター、全国8か所ということで開設をいたしました。4 ページの下の方に書いてありますけれども、北海道は若干準備期間をとりましたが、基本的には7月に全国8か所で開設いたしております。細かい研修会のようなものから、様々、それぞれ地域の特性を生かした取組

を行っています。代表的なものとして、こちらで取り上げているのは四国でキックオフということで、開設日に学びあいフォーラムということで95人程度集まっていたきまして、今後の四国での取組というのを議論したというものをしております。今後は、全国センター、地方センター、それと協働してくださるESD拠点というのを中心に活動を広げていきたいということで、今年度から予算を付けて、今後継続的にやっていきたいと考えているものでございます。以上です。

- 及川議長 ありがとうございます。

では次に、ESD推進の手引の改訂について、文部科学省より御紹介をお願いします。

- 鈴木国際統括官補佐 資料1-③をごらんいただけましたらと思います。こちらにつきましては委員の皆様には事前にメールでお送りしておりました。『ESD推進の手引』につきましては、平成28年3月に学校で具体的にどのようにESDを実践するかにつきまして、担当の指導主事の皆様、また、学校の管理職の皆様を対象に考えまして、作成したものでございました。優良事例、Q&A等を含むものでございます。28年度3月に策定いたしましたけれども、改訂につきましては今年のこの委員会でも棚橋委員から御指摘いただいております、今回アップデートという形での改訂を考えております。

具体的にはSDGsの策定、新学習指導要領、そして、ユネスコスクールの制度改革といったものを踏まえて、内容のアップデートを行うものです。特にSDGsにおける教育、そしてESDの重要性、また、SDGsを活用したESDの実践事例、そして、新しい学習指導要領とESDの関係といった辺りを新しい要素として含む改訂となっております。この『ESD推進の手引』につきましては、こちらの円卓会議の文責で出させていただくものではございませんけれども、できるだけ私どもも有識者の皆様からの御意見をたくさん頂いた上での改訂としたいと思っております。本日配付させていただいております。本日の御議論、また2月26日をめどに事務局の方に御意見を頂戴できましたら、できる限りの反映をさせていただきながら3月に向けて改訂したいと思っております。以上です。

- 及川議長 ありがとうございます。

以上、事務局から説明がございましたが、ここまでの説明について何か御質問や御意見がある方は挙手をお願いします。いかがでしょうか。

なお、今、文部科学省の説明にございましたように、『ESD推進の手引』につきましては2月26日まで御意見を受け付けているということですので、この後一読いただきまして、御意見のある方は事務局まで御連絡をいただけたらと思います。

- 辰野委員 質問させていただきたいです。
- 及川議長 お願いします。
- 辰野委員 辰野です。御説明ありがとうございます。こちらの手引ですけれども、3

月初旬に最終版の完成ということですが、その後どのように手に入れることができますでしょうか。また、仮にどなたでも手に入るものでしたら、それをもって、例えばこちらには担当指導主事の方や学校管理職を対象としたと書かれているんですが、ESDに興味のあるユースですとか、若手の先生方などに配付して説明会などを行っても問題ないのかというところも確認させてください。

- 及川議長 事務局、お願いします。
- 鈴木国際統括官補佐 まず、一番簡単に入手できる方法といたしましては、ホームページにアップいたしますので、そこからのダウンロードが可能となります。また、白表紙の冊子を作成しております。教育委員会の指導主事様、あるいは学校の管理職の方が使えるようにというところで作ってはおりますけれども、是非ユースの方等、いろいろなところで御活用いただければと思います。
- 辰野委員 冊子の方は文部科学省の方にお願いますと、冊子で頂くことが何冊でもできるということでしょうか。
- 鈴木国際統括官補佐 ある程度可能でございます。
- 辰野委員 分かりました。ありがとうございます。
- 及川議長 よろしいですか。
- 辰野委員 はい。
- 及川議長 今回の改訂は、先ほど事務局の説明にありましたように、アップデートということで、いわゆるマイナーチェンジということですので、今後、大きなタイミングでまた改訂ということもあり得るというふうに思います。学校教育、とりわけ管理職、あるいは指導主事をターゲットには作っておりますが、これが一般教員であるとか、社会教育であるとか、あるいは市民であるとか、ユースであるとか、広く汎用できることはたくさんありますので、是非皆様方も研修会や様々な学習会で御活用いただければよろしいのではないかとこのように思っております。

それでは、次に移ってよろしいでしょうか。では、議題2のESDのSDGsへの貢献について、まずは委員の先生方から取組の御紹介をいただければ幸いです。

なお、本議題につきましては、本日の議論を今後グローバル・アクション・プログラム、通称GAPの後継計画がユネスコで議論される際に日本からのインプットとして反映させていただくことを目的に皆様から御意見を頂戴することになります。

まず、次第に掲載されております5名の委員の方々から各セクターで行われている事例を発表いただきまして、それを踏まえて皆様から広い視点で御意見を頂ければというふうに考えております。そういう流れでいきたいと思っておりますので、どうぞよろしくをお願いします。

発表の後に、委員の皆様から御意見を頂きながらディスカッションで練り上げていきたいと思っておりますので、大変恐縮ではありますが、発表される方はお一人7分

程度で発表をお願いできればと思います。

では、トップバッターとしまして、学校教育現場からの代表ということで、手島委員より資料2-①を用いて御発表いただければと思います。手島委員、お願いします。

- 手島委員 学校の教員をやっておりますので、どうも座って話すのが苦手なので、立って失礼します。

ESD の SDGs への貢献についてということ、学校現場から見えること、少し問答形式でまとめてみたらどうかと考えてみました。

SDGs と ESD と同じなんですかとよく聞かれます。SDGs が始まったときに、ユネスコスクールの先生方が大変戸惑いました。今でも戸惑っている方が大勢います。また違うものをやらされるのかな、しかし、持続可能な世界をつくるという国連の取組としては全く変わりありませんね。ESD はその中でも E、教育を中心に進めていますが、SDGs はゴールズ、目標を列挙して、関係省庁、あるいは自治体、企業も参加しやすくしたものです。

ピコ太郎さんの活躍によって SDGs に向かう国民的な機運が高まっていることもあり難しいことだと思っています。

しかし、私は、この SDGs が進むことについて幾つかの心配がありました。目標が細分化されたことで、つまり、企業が、我が社はこの中の7番、あるいは9番をやれば、部分的な取組をしっかりとやればいいんだというような勘違いが広がりかねない。また、企業の CSR として進められると、それがイベント的なものになったり、成果主義や競争原理でこれが進むようになってしまったら、それを表彰して終わりというようなことでは困る。また、経済効果を強調する余り、方向がまた違っていってしまう可能性もある。こんなことを懸念しておりました。

つまり、どんな取組であっても、人が本気にならない限り、持続可能な世界を実現することはできない。人の心に生涯消えない灯をともし、それが学びだと思ふんです。その学び抜きにイベント的にならないように見守っていかなきゃいけない。ESD の E が特に大事だということを強調していきたいと思っています。

ということは、学校でも社会でも SDGs の推進には ESD が中心なんですかという問いが次に来ると思います。そうなんです。ESD を推進してきた八名川小学校も、ジャパン SDGs アワードに応募した理由というのはそこにあるわけです。SDGs における教育の重要性というものをしっかり再認識してほしかった。

資料2-①-2にありますように、先日、国会議員や地方議員、あるいは関係機関へ発信する場もいただいております。そこでも、やはりこれが大事なんだということをしっかり強調させていただいたわけです。

八名川小学校の封筒を開いていただけますでしょうか。そうすると、こんなパンフレットが入っております。そのパンフレットを開けていただいて、もう一回開けてい

ただくと、中に SDGs の実践計画表というのが出てきます。細かい字ですが、各学年で取り組む単元が 16 のロゴの下に入っています。つまり、学習指導要領を踏まえて、棚橋委員の連光寺小学校や八名川小学校のように、あるいは大牟田の小学校のように、学校教育をきちんと進めていくと、SDGs の全ての課題の欄の中に小学校の 6 年間でもいろいろなものを網羅することができる。これが SDGs を意識したカリキュラムマネジメントの具体例と言えると思うんです。つまり、SDGs という、これは私も箱のようなものだと考えているんですが、そこに組み込んだ実践をどこに入れようかな、これは何番に入るかなと言って、ぽんぽんぽんと放り込んでいけばいい。後から放り込んだらこんな形にできる、こういうことです。

これは逆にしたらだめなんです。こっちがゴールだからといって、そこに向かって作っていかうとすると、実践がつまらなくなってしまうんです。そういう意識はあってもいいけれども、それだけでやっていくと逆になるんじゃないかと思います。

このように、全国の学校教育で ESD を進めると、日本じゅうの子供たちが変わる。それから、保護者が変わる。地域が変わる。つまり、学習指導要領の下で SDGs は全国で一斉に展開することができるということです。でも、従来の教育と ESD は違いがあるわけです。何が違うかというと、教育観が違います。基本的な知識も理解も重要であることは変わりませんよね。でも、今の時代、スマートフォンを使用すれば、何でも手に入れることができます。だから、大事なのは問題に気付く力。そして、視点を持って様々な知見を組み合わせ活用を図る能力。そして、自分と異なる考えにも耳を傾け、新たな視点から考え直せる力。これが重要になる。それが今までの学校教育で育つんですかということになると、それはちょっと難しいでしょうということです。ばらばらですからね。だから、ESD カレンダーによる学年ごとの学びの構造化が必要になっていくわけです。

つまり、ピコ太郎さんの PPAP のように「道徳～、特活～、生活～、ハア！『総合的な学習の時間』とやればいいわけですよ。そうすると、そこにカリキュラムマネジメントなるわけです。これが ESD カレンダーなんです。そして、八名川小学校の先生たちは、懐に台所用のライターを持っているんです。子供の心に学びの火をつけるんです。これがないと教え込みになっちゃうわけです。ですから、問題解決的、あるいは対話的な学習が重要だということです。学校教育が未来を変える、こういうことは大事なことだと思います。

このパンフレット、あるいは具体的な例について、指導案の展開はこの冊子の中に入っています。それから、そういう学校を作っていくにはどうしたらいいか。これは経営の視点がどうしても欠かせません。経営の視点を書いた本も用意しました。『学校発・ESD の学び』という本にまとめました。こんなことを参考にさせていただきなから、全ての学校教育をうまく ESD で進めていかれるように、また、それが SDGs に貢

献できるようにしていきたいと思ひます。どうぞよろしくお願ひします。以上です。

- 及川議長 手島委員、ありがとうございます。先ほど冒頭で統括官の方から ESD が新学習指導要領の基盤となる理念であるというお話がありましたが、今、手島委員がそれを受けてカリキュラムマネジメントの視点も踏まえて、熱いメッセージを学校教育から発信していただいたというふうに思ひます。

それでは次に、地域の取組として安田委員より御発表いただきたいと思ひます。資料は 2-②になります。よろしくお願ひいたします。

- 安田委員 失礼します。大きく 3 つお話をしたいと思ひます。まず一つは大牟田市の紹介をさせていただきます。それから、大牟田版 SDGs を作る経過、そして、大牟田版 SDGs の中身についてお話をさせていただきます。

大牟田はかつて三池炭鉱で栄えたまちでございますけれども、平成 9 年に閉山いたしました。ちょうど平成 29 年、昨年で閉山 20 年ということになります。かつては二十数万の都市ですけれども、現在 11 万、人口が半減したまちでございます。私どもは何とか持続可能なまちづくりに向かって頑張らなければならないというときに、ちょうどユネスコスクール・ESD のお話を聞きました。そこで、平成 22 年に教育委員会として、このユネスコスクール・ESD をやっていこうという思いがありましたけれども、トップダウンでは絶対にうまくいかないということで、校長会にこのお話をいたしました。校長会で十分に議論していただきました。そして、校長会としてはどこかの学校が一つということではなくて、みんなでやろうということになりましたので、教育委員会と学校が一緒になってやっていこうということで、平成 22 年に申請いたしました。そして、平成 24 年 1 月に、ありがたいことに大牟田市立の小学校、中学校、特別支援学校が一斉にユネスコスクールに加盟いたしました。

そこで、ユネスコスクール支援センターを、前の市長にお願いしたら、是非進めようということで、人も付けていただくことができました。その後、現在の市長になりましたけれども、市長を本部長とする大牟田市 ESD の推進本部を立ち上げていただきました。推進本部の委員は全部の部長ということになります。全庁的に ESD を進めていこうということになりました。

そこで、1 月 17 日にユネスコスクールに一斉に加盟しましたので、大牟田市は教育委員会の制定として 1 月 17 日を大牟田のユネスコスクールの日といたしました。今年 1 月にちょうど市制 100 周年を記念いたしまして、市長の方からユネスコスクール・ESD のまち大牟田宣言、都市宣言をしていただいたところでございます。

さて、大牟田版 SDGs のことでございますけれども、まず SDGs について教職員向けの研修会を行いました。何がこれからの課題なのかということも含めて SDGs の研修を行い、その後、校長会で各学校の教育活動をこの SDGs の 17 についての分析を行っていただく。同時に並行して、校長会、教頭会、教務主任の代表と教育委員会によ

るプロジェクトチームを作りまして、この大牟田版 SDGs の検討をしたところでございます。

それでは、2-②の資料、パンフレットでございますけれども、2 ページを開けていただきますと、大牟田の 5 つの P というものがございます。このように大牟田としては 5 つの P を考えているということでございます。

そこで、3 ページでございます。一番下、大牟田の課題ですけれども、少子高齢化、人口減少、それから石炭産業の衰退ということで、どのようにまちをこれから継続していくのかという大きな課題もございます。その一方では、エネルギー・環境ということでは公害を克服したということ。さらには世界文化遺産、石炭関連の明治日本の産業革命遺産がございますので、そういう世界文化遺産を活用するもの。さらには、東京大学と協定を結んで海洋教育、有明海、それから、現在も稼働資産であります世界文化遺産の三池港を活用しながらの海洋教育。このような強みを持ちながら、大牟田の SDGs について検討したわけでございます。

17 のうちの 2 つを基盤目標といたしました。一つは、当然 4 番目の教育ということ。それから、17 番目のパートナーシップというところを基盤目標として大牟田の実態を踏まえて重点目標を上の 8 個に定めたところでございます。

それでは、4 ページ、5 ページをごらんいただきたいと思います。4 ページは、先ほど申しました基盤目標の考え方、4 番と 17 番の考え方を示し、それから 5 ページは次の 8 つの内容についての見方ということです。一番上に 15 番目で、例えば「陸の豊かさも守ろう」というところで大牟田が重点的に取り上げるゴールを示す。それから、その中の具体的なターゲットの中のどれと関連するのか。その下で赤のところが大牟田の市としてのまちづくり総合プランを示し、その中の内容と、このターゲットがどのように関連するのか。さらには、大牟田の学校教育振興プランがありますので、その内容とどれが関連するのかということを示しております。そして、学校ではどのような具体的な活動を取り上げているのか。そして、一番下が、このような取組の中で、目指す子供の姿を示しているところでございます。

それが 6 ページ以降、それぞれのターゲット、8 つのターゲットの内容を示しているわけでございます。6、7、8、9 ページ、10 ページ、11 ページということになります。12、13 まで行きます。最後の 14、15 をごらんいただければと思います。14、15 につきましては、先ほど申しました校長会等で 17 をそれぞれの学校が具体的にどのような活動として関連しているのかということで分析したマトリックスということになります。

それから、その下が教育委員会として様々な事業に取り組んでいますけれども、それが 17 の内容とどのように関連するのかということを示しているわけでございます。このように、本市ではユネスコスクール・ESD を進めておりますけれども、先ほど手

島校長先生からもお話がありましたように、SDGsを進めていくということは、ESDを進めていくことがSDGsにつながっていくというふうに本市も考えているところでございます。

なお、この作成に当たっては本日の議長の及川先生にしっかりと御指導いただきながら作成したものでございます。以上です。

- 及川議長 ありがとうございます。大牟田市は全国大会を昨年12月に開催しまして、全国から1,000名近くの参加者があったわけですが、日本でも先進的にホールシティー、市全体でESDに取り組んできました。その取組をベースに、更に地域性や地域の課題やよさを生かしながら、SDGsということで、市全体で取り組んでいくという、また新たなステージに踏み出しました。まさしくESDを通じたSDGsへの貢献を地域から発信していくという御発表だったと思います。どうもありがとうございました。

続きまして、経済界の取組ということで、長谷川委員からよろしくお願ひいたします。資料は2-③-1と③-2になります。よろしくお願ひします。

- 長谷川委員 経団連の長谷川でございます。経団連では7年ぶりに企業行動憲章を改定いたしましたので、本日はSDGsの推進ということと関連して、その内容を説明させていただきます。

こちらが経団連の企業行動憲章で、これは皆様、お手元に配付しております。開いていただきまして、こちらの左側が企業行動憲章の10か条ということで、経団連が全会員企業——今1,350社ございますが——に入会するときはこの行動憲章の遵守を求めて、サインを求めるといった内容の条文になっております。経団連では、この10か条の条文と、それから、各条文を企業が実際に実践されるに当たって、参考となる心構えですとか、国際条約ですとか、アクションプランですとか、ベストプラクティスの事例など、『ESD推進の手引』というのもありましたが、経団連も実行の手引という文書を会員企業には全部お配りしてございまして、ガイドブックみたいなものですが、このガイドブックに基づいて10か条を実践してほしいということでやっております。

本日の説明は、こちらの資料2-③-2に基づいて説明させていただきます。1ページ目は今御説明したことですけれども、企業行動憲章というのは、経団連が全会員企業及び業界団体ですね。今109の業界団体が会員となっております。それから、地方別の経営者協会もたくさんございまして、そういった全ての会員企業に対して遵守を求め行動原則となっているということでございます。

ページをめくっていただきまして、2ページです。企業校同憲章の変遷となっております。企業行動憲章というのは、もともと1991年に当時リクルート事件ですとか、証券不祥事ですとか、いろいろな企業不祥事が起きたことを受けて、企業は高い倫理

感を持って責任ある行動をとるべきだということから、最初に制定したというものでございます。その後の社会経済状況の変化を踏まえて、その都度、改定を重ねてきておりますが、直近では CSR の推進に焦点を当てて改定を 2 回行って、そして、昨年、持続可能な社会の実現、SDGs の推進ということを柱に改定を行ったところでございます。

3 ページに、今回、企業行動憲章を改定した背景を述べております。これは御説明するまでもないのですが、様々なグローバル課題、反グローバリズムですとか、テロですとか、保護主義、また貧富の格差、地球環境問題など、グローバル課題が今台頭していて、国際経済の安定的な発展が脅かされているという認識がまずある。そういった中で、国連では、ビジネスと人権に関する指導原則が国連人権理事会で採択されまして、企業には人権を尊重する義務と責任というのを求められるようになった。

それから、2015 年に SDGs、2030 年アジェンダが採択されたということで、企業にはグローバル課題の解決に向けたイノベーションと創造性の発揮が求められているということを経団連の主要会員企業も強く認識しているということでもあります。

ここで、SDGs の取組を CSR で取り組むのか、本業で取り組むのかという議論があるんですけども、ここは明らかに、昨年経団連でお会いしました国連のモハメッド副事務総長も Beyond CSR というのをかなり強調されまして、本業で取り組む、ビジネスを通じて SDGs に取り組んでほしいということを強く言われております。これはもちろん SDGs への取組が 12 兆ドルのビジネスチャンスだという話もあるんですけども、そちらに焦点を当てるといよりは、特に大企業ですね。経団連の言う大企業にとってインパクトのある取組をするためには、本業を通じて、本業自体が地球の持続可能性、サステナビリティですとか、もちろん人権ですね、人々の人権を尊重する経済社会作りに貢献するものにしていかなくてはいけない。そういうことを求められているということを認識するようになったことが、今回の改定の背景ということでもあります。

そして、それと時期を一にしてということですが、次のページ、4 ページをごらんいただけますでしょうか。経団連は、今度の新しい中西会長が主導されたんですけども、第 5 期科学技術基本計画で、Society 5.0 の実現というのを目指しております。この Society 5.0 というのは、人類社会上の 5 番目の社会、いわゆる狩猟社会とか、農耕社会とか、情報化社会とかいうものの次に来る超スマート社会というふうに位置付けておりまして、こちらでは核心技術、IoT ですとか、ロボットですとか、それからビッグデータを活用して様々な社会的課題に最適解決のソリューションを見付けることによって課題解決を図れるということでもあります。

経団連の中では Society 5.0 を実現して、日本の社会的課題の解決を図ろうということをやっていたときに SDGs が出てきたので、これはまさに経団連としては Society5.0

を推進することで SDGs 自体の達成にも貢献できるということで、これを活動の基本方針にいたしました。そのイメージ図となっているのが 5 ページ目にあるもので、様々な技術的なソリューションを通じて、SDGs の 17 の目標を達成するというイメージをここで解説しております。

こういった Society 5.0 の推進を通じて、SDGs の達成をということで、企業行動憲章を今回改定いたしました。ですので、ポイントとしては 7 ページですが、Society 5.0 の実現を通じて、企業に求められるのが人権の尊重、それから働き方の改革、サプライチェーンへの行動改革の働き掛けなどを具体的に言っているということでもあります。

10 条ありますので、全て解説できませんが、ポイントとなるところだけ述べますと、8 ページ、第 1 条、イノベーションを通じて経済成長と社会的課題の解決の両立を図るということで、まさに企業活動を通じた SDGs の達成ということをうたっている条文であります。

それから、飛ばしていただきまして 11 ページですが、人権の尊重。企業行動憲章に人権の尊重という条文が入ったのは初めてであります。SDGs の 17 の目標は全て人権に関わる原則であるというふうによく言われますが、経団連は人権侵害をしないだけでなく、人権尊重に通じる包摂的な社会作りということもアクションプランの方に盛り込んでおります。

そして、最後の 10 条でございます。こちらが経営トップの役割ということです。17 ページですね。経営トップの役割として、経営トップは企業行動憲章の精神、いわゆる SDGs の達成に向けてコミットメントをする。その上で、SDGs を経営に組み込む。経営に組み込んでこれを実際にサプライチェーンにまで、この精神に基づく行動を促すというふうになっております。サプライチェーンにまでこの行動を促すというふうな言葉が入ったのは今回が初めてということで、こちらが今回の企業行動憲章の主な改定のポイントでございました。以上です。

- 及川議長 ありがとうございます。経済界の取組ということで Beyond CSR というのは非常に印象的です。本業で SDGs への貢献ということで、非常に力強いメッセージを頂きました。

それでは、次の委員の発表に行きたいと思えます。主に環境分野で御活躍の阿部委員の方から御発言を頂きたいと思えます。

- 阿部委員 おはようございます。私は環境分野から話をということで、今おっしゃっていただいたんですが、先ほどまでの手島委員、安田委員、長谷川委員、本当にそれぞれの活動の中で環境からの取組もいっぱい入っております。また、先ほど永見室長から御紹介いただいた ESD 活動支援センター、全国、地方でのフォーラムの中でも SDGs に関連した環境関係の取組はいっぱいありますので、あえてここではそういうことよりは、これから広げていく課題について少しお話をしたいなというふうに思っ

ております。

まずは先ほど冒頭で手島委員がおっしゃった、ESD は SDGs を進める一つのエンジンだということなのですが、まさにそのとおりで、これは ESD、私共始めたときに、花びらをつなぐ絵（ESD の花びらモデル）を描きまして、花びら一つ一つは課題教育ですね。環境教育とか、平和教育とか。その花びらが重なる部分、そこを ESD のエッセンスというふうに呼んでいました。今日も数人の委員が SDGs の国連バッチを付けておられますが、花びらモデル同様 SDGs バッチの、まさに中心の円部分が ESD のエッセンスだということなんです。そうすると、ESD は 17 目標に関わるあらゆる主体やテーマをつなぐ装置ということが出来ます。ですから、そう考えていくと、ESD が SDGs を進めていくためのまさに装置でありエンジンだと言ってもいいかと思います。ただ、ESD だけでなく、17 目標の一つ一つ全てがそれぞれ他をつなぐという関係になっていますので、その点は、私共もちろんと理解しながら、ESD を考えていったらよいと思います。

そこで、例えば環境分野ですと、ESD を頑張っている自治体の一つとして北九州市がありますが、北九州市は環境基本計画を改定しておりまして、その中で ESD と SDGs を入れ込んでおります。つい先だっても改定のための会合があったことをネットで拝見しました。そこでは ESD とか、SDGs とか、ほかにもあるんですが、アルファベットの用語が入っていて分かりにくいとの議論があったようです。ESD の先進地域である北九州市でもそういう状況でして、まだまだ ESD も SDGs も、私どもも関わっておりますけれども、国民的な運動になっているかということ、残念ながらそうっていない。何とか、例えば ESD も含めてですが、SDGs という言葉が一般化していくことが必要じゃないかと。

そのような視点でちょっと面白い事例をお話ししますが、例えば今日はバッチを付けておられる方、持っておられるけど、今日はたまたま忘れたという方もいらっしゃいますが、これを付けていると、対話が始まるんですよ。大体の方は御存じないですね。それは何ですかと。いや、これは SDGs というものでとかいって、色が 17 色あるんですよ、といった話で対話が始まっていくんですね。そんな中で、こういったコミュニケーションツールといいますか、非常に大事だ。例えば先ほどピコ太郎さんの話がありましたけれども、ネットを見ると、いろいろな方々が歌やパフォーマンスで SDGs をやっていますね。私も「We Love the SDGs」というのが好きでして、あれは本当に授業でも見せるんですけども、あれを見ると、学生たち、これが SDGs なんだと分かる、理解できるという。これは ESD でも劇団シンデレラというのが頑張っているところやったださっておりますが、そういうアプローチもまずベースとしてあるんじゃないかと思いますね。始まりとしてあるんじゃないか。

そこで、実はかねてから ESD に取り組んでいらっしゃる中学受験の塾の、名前を出

しちゃいますけど、日能研が非常にユニークな SDGs を中学受験で子供たちに知ってもらおうという、そんなテキストを出しておりますが、これはこれで、私もなるほどなということが多々知ることができましたけれども、言いたいことはその日能研が私ども NGO と一緒に国連 SDGs バッチを作られたんですね。3月3日のESD学会の集まりで参加者の方々に配付しようという計画もあるようであります。要は、アプローチとして誰でもESD、それって何？と言う、そこに関心を持つ。関心を持つと、その後は今日の手島委員や安田委員が実際にやっておられるような、そういった活動が広まっていく。ですので、そういう非常にやりやすい形で入れていくことが必要なのかなと思っております。対話ですね。

また、大学では、特に学生が関心を持ってあちこちの大学でSDGsに取り組んでおります。これも一つの例じゃないかと思えます。あるいは講義に授業科目の中に先ほどのSDGsの目標を入れていくという、そんなことも始まっていますので、これは私どもの大学でもやっていきたいと思っております。以上です。

- 及川議長 ありがとうございます。

それでは、最後になりますけれども、国際協力の分野から上條委員より御発表いただきしたいと思います。資料は2-④-1と④-2になります。よろしくお願いします。

- 上條委員 ありがとうございます。国際協力の分野ということですが、国際協力の中でも市民社会組織の取組ということで、3つほど具体的な事例を御紹介したいと思って持ってきておまして、その中の2つが資料として配付されているものです。一つは初等教育資料で文科省の方で掲載していただいている記事の抜粋、それからもう一つは教材の紹介ということです。そのお話の前に既に皆さん御承知おきかと思えますけれども、国際協力のNGO、市民団体はSDGsの推進をする上で、先ほどエンジンという話がありましたけれども、非常に重要なアクターの一つであるという認識です。海外協力、あるいは途上国の現場の開発に関わる活動を発端として組織ができているわけですが、昨今の動向として日本の中での普及啓発活動に加えて、日本の地域のまちづくりであるとか、それから、災害復興支援であるとか、あるいは学校からの要請で講師派遣であるとか、国内の活動が様々なニーズ、それから、必要に基づいて増えているというふうに感じております。その傾向はこれからますます強まるだろうというふうに考えております。私が所属している開発教育協会でもそういったNGOから国内の活動についてのアドバイスを求められることが非常に増えているというのは実感としてございます。そのような背景の中で3つほど事例を紹介したいと思います。

一つ目は文科省の初等教育資料のコピーです。ちょっと文字の方が小さいので見にくいと思いますが、こちらは国際的な活動の一つとしての紹介ですが、GCE、グローバル・キャンペーン・フォー・エデュケーションと言って、世界でSDGs

の目標である全ての子供たち、人に教育をとという活動を推進している国際組織があるんですね。そちらの活動として世界一大きな授業というものがあります。それを日本の中でも実施しようということで、実施主体が教育協力ネットワークという NGO のネットワークがごさいます。25-6 団体が所属しておりますけれども、全国の小中高に呼び掛けて、4 月のある 1 週間を設定して、日本だけでなく、世界じゅうでこの 1 週間というのは同じなんですけれども、教育に関する、小さくても大きくても、時間は問いませんけれども、授業をしましょう。そのキャンペーンの中でやりますと手を挙げてくださったところはネットワークの方に登録していく。そうすると、全体でどのくらいの方が参加してくれたのかというのが把握できる。

教育に関する授業、世界の子供たちの状況といっても、全ての先生がそのことについて授業をするということは難しいので、なるべく簡単に分かりやすいものが必要だということで、教材を作っています。それを無料配付して、エントリーしていただくというような方式なんですね。

世界中では、こちらに書いてあるんですけども、2003 年にスタートして、これまでに 885 万人が参加しているという、ギネスブックに登録しているというほど、世界的な動きになっているんですが、日本でも毎年 5 万人以上の子供たちが参加しているという活動がごさいます。これが国際教育協力を主に携わる NGO のネットワークの動きの一つとして御紹介したいと思います。

それから、2 つ目ですけども、こちらは資料がないんですが、先ほどいろいろな NGO、市民組織が普及啓発資料の作成を急務としているということで、開発教育協会が JICA の NGO 等提案型プログラムという受託事業を受けまして、SDGs 達成に向けた教育実践者の育成というプログラムを実施しております。その一つがつい先だって 1 月に開催されたんですけども、SDGs 教材お試しセミナーということでいろいろな団体さんが参加してくださったんですけども、それぞれ自分たちの活動の中で、SDGs につながる目標に向けて活動しているわけなんですけども、普及啓発資料を作りたい、教材を作りたい、でも、どうやって作ったらいいか分からないというところで、作りかかっている、あるいは種になっている教材を持ち寄って、どういった形でそれを具体的な学習教材にしていくかということのお手伝いをするセミナーをしました。

参加してくださった団体さんが本当に様々で、フェアトレードを推進している認定 NPO 法人 WE21 ジャパンですとか、プランテーション・ウォッチ (PLANTATION WATCH)、国際協力 NGO ワールド・ビジョン・ジャパン、皆さん御存じのような団体もあれば、NPO 法人 監獄人権センターというところが今回参加して下さって、裁判員制度があるわけですけども、そういったものがまだまだ民間に知られていない。人権を守るというのはどういうことかということを考える教材ということで、御相談がありまして、一緒に参加して下さったという非常に幅広い市民組織がそうい

った目標に向けて活動しようとしているということを、肌感覚で私どもも実感しております。また、まだまだこういった支援が必要だなというふうに感じております。

最後は、御紹介ですが、私どもの団体でスマホの教材を現在作成しております。3月末に完成予定です。「スマホから考える 世界・わたし・SDGs」ということで、私たちの身近なものから世界にどういった影響を与えているかということをお勉強する教材ということです。先ほど手島委員の方からも様々な知見が共有されたんですが、現場の先生であったり、市民一人一人が生き生きと活動している。それが積み重なって、SDGs 達成、ESD というものになっていくというのは、私どもも非常に共感するところで、一つ一つの実践を大事にしながら、それを上手に SDGs、あるいは ESD につなげていくという活動を今後も進めてまいりたいと思っております。以上でございます。ありがとうございました。

- 及川議長 上條委員、ありがとうございました。

以上5名の委員から話題提供、御発表いただいたわけですが、皆さん御承知のとおり、非常に多様なセクターから、多様なアプローチでの御発表並びに提言を頂きまして、ありがとうございます。大変示唆深いお話があったかなというふうに思います。これも円卓会議ならではの、多様なステークホルダーが参画、協働するこの会議ならではの一つのアウトプットというふうに思っております。

それでは、これから残された時間、存分に使いまして、皆様方から様々な御意見、あるいは御提案等も含めて、あるいは実際の紹介等も含めて、御発言を頂きたいと思っております。最初に、せっかく5名の方々から御発表いただきましたので、それに関して御質問、あるいはもうちょっとこの辺のところを聞きたいというところがあればお受けしたいと思うんですが、いかがでしょうか。どの発表についてもよろしいので、よろしく申し上げます。飯田委員、よろしく申し上げます。

- 飯田委員 ありがとうございます。飯田と申します。質問させていただきます。

2つ目の地域のセクターからお話いただいた安田委員に質問があります。大牟田市の取組で SDGs というものをローカル版に落とし込んで、大牟田版の SDGs を作ったというのはすばらしい取組だなと思って拝聴していました。私も新宿の NPO で活動しているので、是非こういうものが各都市で、トップダウンではなくて、ボトムアップの形でマイナーチェンジしながら、ローカルにしていくのはすばらしいなと思って聞いていました。

いただいた資料 2-②の冊子で、表紙のところに「Ver.1」と書いてありまして、これは僕の見ただけではこれから成果とか進捗状況を踏まえて更に改善していくとか、見直しを絶えず進めていくということなのかなというふうに考えたんですが、大牟田版 SDGs の今後の展開について是非お聞かせいただければと思います。

- 及川議長 それでは安田委員、よろしく申し上げます。

- 安田委員 ありがとうございます。今、御質問いただいたとおり、表紙の上に「Ver.1」と書いておりますので、まさにこれはまだまだ作って、現実的な課題の中での取組ということでございますので、取組の中でまた新たな課題も生まれてくるだろうというふうに思っております。そういう面で、見直しをしながら、これを更に質を高めていきたいということで、今回、最初に作ったということで、バージョン1ということでございます。今、教育委員会も含めて、各学校ではマトリックスもありますので、見直しをしながら更に深めていきたいというふうに考えております。
- 及川議長 ありがとうございます。飯田委員、よろしいでしょうか。
- 飯田委員 はい。
- 及川議長 これからも改訂を続けながら、持続発展していくという大牟田版 SDGs だということだと思います。手引も同じような状況で今改訂を進めていますが、ESD というのは常に進化しつつあるものだということであると思います。
そのほかいかがでしょうか。諏訪委員、お願いします。
- 諏訪委員 日本環境教育学会会長の諏訪です。この間、いろいろなところで SDGs に向けて活動が活発化していること、すごくうれしく思っています。特に経団連が企業行動憲章を変えたというのを11月に知りまして、非常に高く評価しています。一方で Society 5.0 というのにかなり危険な側面もあるのではないかとということに危惧しております。今、手元に持っているのは『インターネットは自由を奪う』という本ですが、結局、インターネットが普及して格差が進んだと指摘しています。Society 5.0 というのも、格差をますます拡大させる危険をはらんでいるのではないかとということが各方面で言われていて、その辺について、十分に経団連さんには、御配慮いただきたいということです。今後とも大変な努力が必要かと思いますが、そういう要望を持っておりますということをお伝えしたいと思っております。
- 及川議長 御質問というか、お願いも含めてのことだと思いますけれども、長谷川委員、お願いします。
- 長谷川委員 確かに Society 5.0 の一つの大きなポイントにビッグデータというのがございまして、これはいわば個人情報なんですね。ですので、そういったプライバシーの問題ですとか、個人情報保護をどうするのかとか、情報セキュリティー、サイバー攻撃に遭うという問題もございまして、課題は非常に大きいと思っております。また、おっしゃるとおり、Society 5.0 が貧富の格差拡大の方に行く可能性も、リスクはもちろんあるというのは分かっておりまして、ただ、逆に言うと、経団連としてはそうではなくて、ソサエティーを革新技術とビッグデータによるいろいろな最適ソリューションを持って、過疎地の遠隔医療の問題ですとか、若しくは過疎の学校でオンライン教育をやるとか、あとは今いろいろなサービスが考えられるというところで、それが社会全体の課題を解決する方向、貧富の格差を少なくする方向に行くように、プライ

バシーの問題とか、環境への影響を考えながら進めていきたいというふうに考えております。

- 及川議長 ありがとうございます。よろしいですか。
- 諏訪委員 はい。
- 及川議長 ありがとうございます。そのほか御質問ございますか。上條委員、お願いします。
- 上條委員 お話が戻ってしまうんですけど、先ほどの大牟田版のお話、大変興味深く伺って、以前にも北海道でも自分たちの地域目標を作ろうということで、冊子を作っているとか、いろいろな活動を経験交流するような場というのが仕組みとして今あるのか、これから作るのか、先ほどの ESD 活動推進センターですね。是非お伺いしてみたいです。
- 及川議長 これからの展望も含めて、まず安田委員から大牟田の知見、SDGs の貢献のノウハウについての他地域の交流とか発信について、もし何か思いとか、ビジョンがありましたらお願いします。
- 安田委員 ありがとうございます。12月にユネスコスクールの全国大会を大牟田市で開催させていただきました。文科省さんの配慮でたくさんの方においでいただいて、大牟田についても様々な興味を持たれたといいますか、意見を求められたり、視察も増えてまいっております。そういう面で、この大牟田版 SDGs を作ったわけでございますけれども、何か全国との交流ができないかと考えております。実は、毎年ユネスコスクール ESD の支援の教育委員会サミットというものを開催しておりますけれども、これでたくさんの方の地域の教育委員会等々、連携が図れないのかと考えております。その中で ESD なり、SDGs の交流ができれば、それぞれの地域の課題なり、先進的な取組等について交流することによって更に自分たちの見直しができ、深掘りができるだろうと考えているところです。以上です。
- 及川議長 ありがとうございます。大牟田としたら、そういうふうな積極的に発信していきたいという、そういう仕組みというか、スキームを、現存のものもあるし、これからまた新たに開発していきたいという話だと思います。

事務局サイドで、例えば先ほど少しありましたが、ESD 活動支援センターで今のような課題に対しての抱負というか、貢献というものがありましたら、よろしく願います。

- 永見環境教育推進室長 もちろん全国センター及び地方の活動支援センター、あと一緒に協働いただく ESD 活動推進拠点、こういった方々とグッドプラクティスであったり、それぞれの取組の情報共有、発信をやっていくというのがまさに ESD 推進ネットワークの仕事だと思っております。今後気持ちはあってもうまくできていない部分というのも多々あるかと思っております。特に中心でやっている人間は自分が知っているのみ

んな知っている気分になってしまっているところもあるとも思わないでもないところは、私も含めてございますので、うまく情報発信、共有できるような話を、きのうもESDセンターの企画運営委員会というのがありまして、情報発信が未熟ではないかという趣旨の御指摘も頂きましたので、しっかりやってまいりたいと思っております。

- 及川議長 ありがとうございます。文科省からコメントがあればよろしく願います。
- 鈴木国際統括官補佐 文部科学省の方では特にESDコンソーシアム事業が地域を単位としたコンソーシアムで始まりましたので、何となくそこに若干閉じていた部分がありました。ただ、これもコンソーシアム同士の横のつながりということを仕掛けていくことも大事だろうということで、第一歩として昨年度から交流会を実施した他、本年は、活動報告会を公開する形でコンソーシアムという活動をやってない方にも見ていただくというような工夫をしております。いろいろな横の手段で交流が図れるようなことをやってまいりたいと思っております。
- 及川議長 ありがとうございます。補足させていただければ、大牟田の場合は自前といいますか、教育委員会の事業として、先ほど言った教育委員会のサミット等も開催しておりますが、その一方で、九州地方のESD活動支援センターの中核を担っているという部分と、大牟田が文科省のコンソーシアム事業の一つの核であるというふうなことで、今出てきた様々なネットワーク、あるいは様々な学び合い、交流の場を使って発信するチャンスは多々あると思います。そういうところで積極的に、多分教育委員会が中心になった初めての地域版、あるいはカスタマイズ版のSDGsだと思いますので、それを是非広く発信させていただければということでの御質問だったかと思えます。よろしく願います。

佐藤委員、お願いします。

- 佐藤委員 ありがとうございます。御存じのとおり、今度、3月3日に大きなSDGsとESDのシンポジウムというのを開催することになったわけですが、お手元に資料があるかと思いますが、これに関しましても、今皆さんの御紹介があった学校、経済界、地域、環境、国際教育、多くの方々が関わって、350名に達しているという状況でございます。国連のこういう会議の中でも40%が学校の教員というところでもない動きが出てきておりまして、地域のNPOは20%、企業が10%という、非常に多様な人たちが一堂に会してくるといったときに、各々の分野の中で共通言語がまだまだできていない状況の中で、今後協働しながら、学びながら歩み寄っていくような場を作っていく必要があるかと思うんですが、一つは、私、今回、センターと2省の方にお聞きしたいんですけども、ESD活動支援センターというものを、ESDだけじゃなくて、スラッシュSDGsを加えちゃうということによって、より多くの主体というのが関わってくるのかなと思っています。今回も国際協力の方々も非常に多いですし、

国際協力を経験した学校教員の方々も多いんですね。どういうふうにかつうかのような多様な主体が連携し、それをサポートできるようなセンターの機能を構築していくか。それについてどなたに質問すればよろしいか、分からないですけれども、SDGs と ESD、掛けて、どうセンターとして機能していくか、御意見を頂ければなと思ひます。

- 及川議長 ありがとうございます。その前に佐藤委員に確認で、最初に御紹介いただいたイベントは日本 ESD 学会が主催するイベントということによろしいですか。
- 佐藤委員 そうですね。3月3日の開催は、日本 ESD 学会と国連大学の高等研究所の共催になっております。環境省、文科省、そして支援センター、JICA の後援に基づいて行われるものです。今日ぐらいがある程度人数、ぎりぎりになってきていますけれども、もし御関心があれば、応募していただければなと思ひます。以上です。
- 及川議長 その開催イベントの中で、今のような傾向と、ある意味今後に向けた提案が生まれたということだと思ひますが。これはまず、センター関係の話だったので、環境省からお答えいただいてよろしいですか。
- 永見環境教育推進室長 そうですね。気持ちとしては ESD と SDGs と一緒にやっているとつうところかと思ひますし、私が言及するのは申し訳ないですけれども、参考 4 で文部科学省から日本ユネスコ国内委員会での ESD と SDGs の整理というのが出されておひまして、まさにこつうことかなと思ひておひます。

世の中の動きが非常に速くて、SDGs への関心、姿勢というのが非常に前向きになってきているとつうところが若干つかみ切れてないのかなとは思ひ一方で、やはりいろいろ一緒にやりましようというこつを、例えば国土交通省であるとか、農水省であるとか、ESD に関してやっていましようという話をすると、いいですねという話にはなるんですけども、具体的にどうしようというこつは、こちらからちゃんと提案してやらないといけないというこつもあります。

こつうことを考えると、まず ESD を土台にして基軸にして、それでどういった形での協働ができるかというのを具体的に考えていかなきゃいけないというこつを考えると、まず ESD が基軸、基盤であるというこつはしっかりさせておかなきゃいけないし、そこから物事を発想していくというこつが必要かなと思ひておひます。名称については、こつう御要望があればいろいろほかの方々の意見もお伺ひしたいなと思ひますけれども、余り SDGs が前面に出ましまうと、そもそもの基軸となつていくところがどこなのかなというのが分からなくなつてまうという気もいたしておひます。

- 及川議長 ありがとうございます。センターを共催している立場であり、コンソーシアムの新規事業関係の部分でも SDGs に関していろいろと文科省の方でも今話について取り組んでいるというか、今後打ち出す部分があるかと思ひんですけども、文科省から御発言いただいていいですか。

- 鈴木国際統括官補佐 センターの名称に関しては、今環境省の方からお話があったとおりにかと思えます。文部科学省でも ESD は、SDGs のいろいろゴールを達成していくための一つの重要なレバーだろうということで、ESD のコンソーシアム事業の新規で応募ができる部分につきましても SDGs の達成に資する事業をやってくださいということでの募集を現在行っておりますので、この場で御紹介させていただきました。
- 及川議長 佐藤委員の御指摘のところは現在実際に動いているということで、それに皆様も御協力と御助言をいただければと思います。

先ほどこれに関しては、阿部委員の方から発表のときに SDGs のバッチの話が出ましたが、この真ん中の丸が空いた部分に ESD、E が入ると非常に分かりやすいんじゃないかと思えます。それが Education for SDGs のように、これからの ESD の方向性として非常に整理しやすいんじゃないかという話がありました。議長からの情報提供としましては、後で御説明があるかもしれませんが、本日の資料の後ろの方に参考 4 というところに日本ユネスコ国内委員会の教育小委員会からのメッセージということで、特に ESD に取り組まれている現場の先生方並びに先生方以外に取り組まれている方々へのメッセージがあるわけですが、それを開いていただくと、分かりやすいのが、「今日よりいいアースへの学び」という本文の方の 2 ページ目に図がありまして、丸くはないんですけど、四角があって、四角の真ん中にエデュケーションという部分が入っています。先ほど環境省から出された ESD が軸という部分は、エデュケーションが 17 のゴール全体のそれぞれに貢献していくという、このスタンスを抜いてしまうと、ESD と SDGs がごっちゃになってしまうという部分があると思いますので、人材育成を通した SDGs への貢献という ESD の本分をきちんと踏まえながらやっていくということだと思います。岡本委員、発言いかがですか。

- 岡本委員 私は学校教育の中で ESD をどう進めていくかということを中心に研究している立場の者です。先ほど御紹介がありましたように、日本 ESD 学会が昨年発足して、中国地方とか、近畿地方レベルで既に研究会が開催されて、学校での ESD の実践が結構発表されるようになってきております。その中で SDGs に関するものも結構出てきていて、それはそれでいいのかなと思っていますけれど、ちょっと心配されるのが、先ほどから議論があるように、SDGs というのは飽くまで目標ですね。ですから、学校教育の中でそれを取り上げたときは、学習のテーマを設定する上では非常に扱いやすくなってきていますが、残念ながらテーマを上げただけで、学習の中身が余り変わっていないというような実態もあるのではないかと思います。

特に新しい学習指導要領では、何を学ぶかということだけではなくて、子供たちがどういう力を身に付けるかとか、どのように学ぶか、というところが重視されているわけで、SDGs が取り上げられていることはいいのですが、それが余りにも前面に出過ぎると、何を学ぶかということばかりが強調されて、結局これまで ESD という名の

下でやってきていたものが、ちょっとおろそかになるのではないかと心配しています。

もう1点、それに関連して、私は、学校の先生方を対象にした校内研修とか、教育センターの研修会などにもよくお邪魔します。学校でESDをやっていきたいので、何をしたらいいのでしょうかという学校が当然多いのですが、ESDを実践する前に探究的な学習が余りできていない学校も実際あります。特に総合的な学習の時間でESDをやりたいけど、どうしたらいいのかということで、その学校の指導計画を拝見すると、探究的な学習になっていないことも多いですね。そこを抜きにしてはESDは無理ではないかと思えます。ESDは持続可能な社会づくりに関わる問題解決学習だと、簡単に言えば私はそう捉えておりますので、探究的な学習のプロセスを重視して、子供たちに知識、技能のみならず、思考力、判断力、表現力とか、あるいは人間性などを育成すること、これはこれまでも言われてきていることですが、その辺りの基本を是非崩さないようにしていきたいと思っています。

ですから、前後しますが、ESD推進の手引についても、私も改めて今回読ませていただいたのですが、探究的という部分が若干弱いという気もしております。またこの後、意見もお送りしたいと思うのですが、探究的な学習の推進について心配があると申し上げたいところです。

- 及川議長 ありがとうございます。棚橋委員、お願いします。
- 棚橋委員 今、岡本委員がお話くださったので、話しやすくなりましたが、新しい学習指導要領の中で持続可能な社会の創り手という言葉が前文ですとか、総則とか、各教科の中にも散りばめられています。今の議題で言うと、ESDのSDGsへの貢献という言葉に今なっていますが、私からすると、SDGsはESDを推進するためにどう活用するかということです。今日はESDの円卓会議ですから、ESDが主役の話をしたいと思えます。学校にいますと、学習指導要領の影響はとても大きいものがあります。ご存知のように、3つの資質・能力を育成するということを示して、その中に先ほど話があった何ができるようになるのかという、その先に社会とどう関わるのか、社会や世界とどう関わるのかという言葉が載っています。それを見たときに、やっとなら書いてくれたか。それから、持続可能な社会をつかっていくという言葉が続けて出てくるなと思ったのですが、それはまだ出てきませんでした。そういう意味があることを皆さんで共有したいです。

ESDを進めてきた我々としては、その言葉をうまく使って、もっとESDを広げる。それから、探究的な学びという言葉が岡本委員から出ましたけれども、それはESDがやってきた、本当に教育としてのやり方のことを示しているわけですから、そのことも含めて、広めるためにうまく使う、そういうスタンスで、是非手引書に書き込んでほしいなと思っています。今の手引書は管理職や指導主事向けになっていますが、現場の教員にとってはなかなか難しく、距離があります。新しい学習指導要領を意識

してもう一段分かりやすいものをリーフレットでも結構ですから、何か用意していただけるといいかなと思います。

それから、大牟田でやりました全国大会のときに少しお時間を頂いて、ユネスコスクールのネットワークの構築についてお話をさせていただきましたが、現在、文科省の御理解も頂いて、ACCU とホームページを作る方向で協議を進めております。

- 及川議長 ありがとうございます。今お二方から教育的な部分で御発言があったと思うんですが、ESD は、E のエデュケーションの側面と SD の側面があって、間にフォーが入っているということで、これは以前から言われているコインの表裏というか、両輪なんでしょうけれども、教育の質を高めるという効果、探究的な学習も含めてですね。そういう効果と、持続可能な社会づくりに教育が貢献するという SD の部分とがあるわけですね。例えば SDGs であれば、SD の部分を国際的にきちっと明文化し、整理したものというふうに捉えるというふうな形になるわけです。しかし、それだけでは ESD ではなくて、エデュケーションでそれを探究的に、あるいは問題解決的に、あるいは最終的な価値観の変容とか、行動に結び付くような教育に持っていく。この両方、どちらが欠けても ESD にならないわけで、その話はこの円卓会議で毎年いろいろと議論される場所なんですけれども、そのためには E を専門とする方々と SD にずっと取り組んでいらっしゃる方々が一緒になって、そこの部分を解決していかなければならないということだと思います。
- 辰野委員 一言だけよろしいでしょうか。
- 及川議長 どうぞ。
- 辰野委員 恐れ入ります。ただいま佐藤先生から ESD 学会についてお話があり、こちらの資料でも「SDGs4.7」が書かれているんですけれども、私どもも昨年 10 月 28 日に Educators' Summit for SDGs 4.7 というプログラムを開催いたしました。こちらはユネスコ・バンコク事務所から支援を受けまして、SDGs 4.7 の可能性を探るための会合でした。このプログラム報告書の 3 ページに「SDGs4.7 とは」と書いてあるのが、緑色でくくられている部分です。ユネスコ・バンコク事務所での 2015 年からの国際会議でもユネスコのインドの MGIEP というユネスコの機関でも SDGs 4.7 という言葉が多用されています。その中で一つ希望と感じているのは、SDGs4.7 の項目に既に ESD という言葉が入っているというところです。ほかにも国際理解や開発教育、さらに環境教育に関わる教育が全て 4.7 の項目の中に、包括されており、まさに SDGs の中における ESD を表現しているひとつなのかと感じております。今議論にございましたように、飽くまでも手島先生がおっしゃるように、ESD はエデュケーションであり、そして、SDGs はゴールであるという大前提の下、Educators' Summit for SDGs4.7 では、SDGs という大きなゴールに向かって、既に日本には「ESD」というたくさんの答えであり、ツールであり、事例があるという前提で、プログラムを行いました。最近、SDGs に興味

のある若者たちにたくさん出会います。今の大学生や高校生は、SDGsは授業などで目にしていますので、若者たちが、世界をよくするために何かやりたいといったときに、既にあるESDというものをきちんと伝えていけるような努力を私もしていきたいと思ひますし、これからも広げていきたいと感じております。

以上です。

- 及川議長 ありがとうございます。今、ユースの活動も含めて御紹介いただいたということだと思います。皆様の活発な御議論で非常に議論が展開してきたところですが、せつかくこれほどの多様なステークホルダーの方々がいらっしやっていますので、皆様方には是非御発言をして、この会にインプットして帰っていただきたいと思ひます。

先ほど経団連の方からお話がありました、同じ経済界としていかがでしょうか。篠塚委員、どうぞよろしくお祈ひします。

- 篠塚委員 前回から1年ぶりぐらいの会議で、今日参加させていただいて、学校の校長先生等から御報告いただきましたが、すごく意識の高いと言つては言葉が適切かどうかわからないんですけれども、そういった学校では積極的に展開されていらっしやるんだなというのがよく分かりました。経済界を代表してというわけではないんですけれども、そういった取組をもっと広げていくことが重要ではないかなというふうに思つたところでございます。

以上です。

- 及川議長 ありがとうございます。朽原委員、この関連でよろしくお祈ひします。
- 朽原委員 発言の機会をありがとうございます。商工会議所は全国に515ありまして、地域に立脚しておりますので、実は皆様以上に地域に対する危機感というものを持っております。一つは人口減少しているということです。それから、地方の若者が東京へ来て、東京への入超になっていることです。この流れに歯止めが掛かりません。それから、事業所数が過去5年間で40万社、廃業などでこの世から消えておりますので、職場もないということでございます。日本全体が縮小均衡に入っているということでございます。地方の疲弊というのがものすごく深刻でございますので、消滅可能性都市が896あるという状況でございます。地域にある小学校、中学校も統廃合がものすごく進展しています。教育活動基盤がそもそも失われつつあるということだと思います。それから、高校、大学の定員割れもあります。これからまだまだ続くということでもあります。持続不可能な状況が生まれているということでありまして、その中で、この問題を私たちは議論すべきであると深刻に受け止めております。

我々商工会議所は、SDGsももちろん意識して事業活動計画の中に入れておりますけれども、SDGsと言つても身近になりませんので、地方創生という言葉に置き換えて、身近なものとして全国で活動しているところでございます。その一環として、

地域を挙げてキャリア教育活動を実践しようということで、現在、286の商工会議所が449の事業を全国で実施しております。小学生対象、中学生対象、高校生対象、大学生については、今は地方創生インターンシップをやるということで教育活動をしておりまして、今日はお配りしていませんけれども、キャリア教育活動白書という冊子に活動をとりまとめて紹介しております。これをまだまだやっていきたいと考えております。

Society 5.0の社会を標ぼうして、これから日本がそちらにかじを切っていくということですが、翻りますと、理工系人材はどれだけいるのでしょうか。なぜ小学校1、2年生に理科教育をしてくれないのでしょうか。こういったことから、中学生に入ると突然文系にみんなシフトしてしまいます。高校になって理系を選択するのが2割とか、3割という状況でありますので、小さいときから将来を見据えた一貫した教育体系というのが実は必要だと思っております。学校で補えないところは地域で人材を育て、地元定着を図るということで、キャリア教育、地方創生インターンシップというのがキーワードだと思っております。その実践活動を各地の商工会議所がしているという状況でございます。

- 及川議長 地域に密着した視点といいますか、根差した視点での御提言ありがとうございます。まさしくESDというのは持続不可能な状況があるからESDが必要だという、根本的な今の問いだと思うんですけども、中央、東京でのESDに対する見方と、地方で持続不可能な事態に直面している、そういう自治体であるとか、学校のESDというのは緊迫度というか、緊張度というか、サステナビリティに対する危機感が違ってくるというのは実際あるのかと思います。日本の一番の持続不可能な状況をきちっと意識しながら、そして地域を見据えながらESDを進めるということの重要性を今御指摘いただいたのかなと思っておりますし、先ほどの安田教育長の犬田版SDGsも根本はそういう地域の持続可能性や創生ということが背景にあって、ああいうものができてきたということだと思います。それらの視点で考えると、同じ自治体で、多少自治体のサイズは大きいですがけれども、岡山市はいかがでしょうか。国際的にもいろいろな発信をして、先進的な事例を持っていますけれども、その辺についてよろしくをお願いします。
- 仁科委員 発言の機会をありがとうございます。岡山市の仁科と申します。岡山市は、及川先生、おっしゃっていただいたように、国際的にもお話があるんですけども、まだまだ地元の方で本当に進んでいるかというとなかなかそういうようなことはなくて、話が戻るんですけども、冒頭、犬田の安田先生の方から紹介いただいたような、こういった取組というのが、自治体の、これは教育委員会さん中心でされていると思うんですけども、一般行政の方でどのように関わっていかれたのかなというふうに、その辺り聞いてみたいと思ったりしているところです。

文科省の方が最初におっしゃったように、SDGs に貢献する ESD というところで我々の方も少し意識をといたしますか、スタンスを改めてというか、立ち位置を変えてということも意識はしておるところですけれども、御存じの方が多いかと思いますけれども、国では内閣府の地方創生の推進事務局の方が中心となって、SDGs の未来都市であるとか、モデル事業を募集というふうな流れもありまして、我々地方の自治体からすると、急にそちらの方が動き出してきて、これまでやってきた ESD を前提というか、ESD との関わりという中で、実際の一般行政の中で落とし込んでいくか、進めていくかといったようなところが、少しこれから急を要するところではあるんですけれども、課題であるかなというふうに考えておるところです。以上です。

- 及川議長 ありがとうございます。

それでは、NGO の立場でお二方、いいですか。瀬尾さんからお願いしたいと思いません。

- 瀬尾委員代理 代理で出席している立場で発言の機会を与えていただきまして、ありがとうございます。経団連の長谷川委員の方から Beyond CSR という言葉があって、私は、以前に企業で働いていた立場と、今のような立場で言いますと、20 年ぐらい前の企業の取組状況からすると、今は格段に進歩しているという印象を持っております。ただ、心配なところは、本業で取り組むというところに強調され過ぎている余り、自社でなければ取り組めないような特別な取組をやるんだということを探して、個社としての取組だけになっている。私も CSR の担当者だった時代を考えると、他社でできないことを、開発したいという気持ちはすごくよく分かるんですけれども、そういう意味で言うと、大きな点がいっぱいできているという感じがすごくするんですけれども、テーマとして 17 ある、そういうものに対して、もっとみんなで協力して、まさに手をつなぎながら取り組むという観点からの、そういうコーディネーション的な役割というのも経団連には是非お願いしたいなど。

一つの例で申しますと、手前みそになって恐縮ですけれども、損保ジャパン日本興亜環境財団というところで、環境についての人材育成という観点から、学生をいろいろな NGO に派遣して勉強させる。8 か月間ぐらい掛けて勉強させるという、そういうプログラムがあるんですけれども、それはそういう人材育成ということで言うと、非常に有意義なプログラムだと思っているんですけれども、こういうプログラムというのは、テーマを環境に限らずいろいろなところにとっていけば、いろいろな企業さんが取り組めることだと思うんですけれども、私そのプログラムを開始したときには、実は日産自動車の同様のプログラムをまねしてやらせていただいたんですが、なかなか、以降、続けてまねしていただくところがなくて、まだ 1 社だけの取組になっているんですが、そういうようなところをやることによって SDGs なり、あるいは ESD の取組というのが人材を厚めにするという観点からも非常に重要じゃないかというふうに思

っております、そういうコーディネーションみたいなものを是非広げていただけたらありがたいというふうに思っております。以上です。

- 及川議長 ありがとうございます。

川上委員、お願いします。

- 川上委員 ありがとうございます。本当に今日は多様なセクターが多様なアプローチをされているということも分かりましたし、いろいろなところで素晴らしい実践が繰り広げられているなというふうに感じたんですね。それ以外にもユニブネットとか、コンソーシアムとか、いろいろな枠組みがある中で、様々な取組を聞いていて考えていたのは、どこかで集約していった方がいいのではないかと、ESD 活動支援センターが担っていただけるのかなということを感じました。つながるとか、ネットワークということが重視されている中で、私たちも全国に 280 ほどのボランティア組織を抱える団体としてつながっていかないといけないと思っていますし、つながることによって1足す1が2ではなくて、3になり、5になりということも可能性があると思うんですけども、どうつながったらいいのかが分からないとか、どういところがどういった活動をしているのかが分からないということがあるので、そういった情報センターという意味での ESD 活動支援センターにすごく期待したいなと思いました。

それからもう1点、地域で活動する人たちを代表する立場としては、私たちは ESD を生涯学習の一環として捉えているんですね。そう考えたときに、一般市民にも分かるように ESD を伝えていくためにはどうしたらいいだろうかとことを常に悩んでいまして、いろいろな手引書も参考にさせていただくんですけども、この言語で分かるかなということもありますので、なるべく短い文章で、大きな文字で分かりやすく、そういう手引書を作ることには、私たち自身も主体的に関わっていきたくと思っていますので、どこかに作ってくださいということではなく、是非作れたらいいなというふうに思っています。以上です。

- 及川議長 ありがとうございます。先ほどお話ししましたが、E も学校教育のみならず生涯教育ということで、市民教育、あるいは大人の ESD というのも確かにあるんだと思います。そういうことも踏まえて我々は取り組んでいくところです。

大変時間が押してまいりまして、まだ御発言いただいている塚本委員から、今の議論を踏まえて国際的な機関ということで、少し俯瞰的な目で御発言いただければと思います。よろしくをお願いします。

- 塚本委員 発言の機会を頂きまして、ありがとうございます。先ほど来、SDGs はゴールであるということで、ゴールである以上達成するためのアクションが必要になってくるわけですが、アクションをとるためには自分事として目標を捉えていくことが不可欠であります。そういう意味で教育が果たす役割、SDGs を自分のこととして解釈し

ていく。それを特に若い世代にきちんと伝えていくという意味で教育の役割は極めて重要で、ESD が SDGs を実現する大きな中心的なツールだという認識を私も一にするところでございます。

その際、今日もたくさんの事例の中でローカライゼーション、それぞれの地域での SDGs の解釈、そして、アクションにつなげていくということを、大変力強い取組があったことを理解させていただいて感謝しております。

それと同時に、今日、国際ということで上條委員からいろいろとお話を聞いたことが大変ありがたかったということでもあります。というのは、No one left behind という大きなテーマの下での SDGs ですけれども、実際に Left behind、取り残されている方は海外にたくさんいらっしゃるわけで、そうした方々にとって、自分たちの存在が忘れられるということが一番の恐怖なわけですね。日本という国が国際社会の中では、大きな先進国ですから、私たちがそういった取り残されそうな、取り残されている人たちに対して何をしていくのかということ発信していくことは極めて重要だと考えております。

先ほど冒頭、文科省、川端統括官のお話の中でバンコクで GAP の後継のコンサルテーション会議などもあるということでもございました。その中で、SDGs の実現に対して ESD を通じて日本も貢献していくんだというメッセージを発していただくことは、我々大変ありがたいことだと思っております。よく国際貢献といいますと、ODA でお金を出すということに単純に思われがちですけれども、しかし、Left behind の方々が存在していることを日本の子供たちが学び、また、なぜそうなのか。あるいはどうしたらいいのかということ自分たちで考えているんだというメッセージは極めて重要でありまして、またエンカレッジなメッセージになると思っております。そうしたことで、今日は大変ありがたいお話を伺いました。

それからもう一つ、SDGs を作るきっかけとなりましたリオ+20 の会議がございましたが、その中で現実的には SDGs を実現するためにはお金が要るんだと。しかし、その中で、公的資金を担うのはわずか 2 割だろうと言われております。8 割は民間事業のマーケットを通じた活動によって実現されていくんだという認識が示されておりました。そういう中で、本日、経団連さんから本業として SDGs に取り組んでいくというお話が伺えたことを大変心強く思いました。こうした日本の取組を是非世界にも発信して、私たちもいきたいと思えますし、環境省、文科省におかれましても、是非 GAP の後継ということでインプットしていただくとありがたいと思えました。以上でございます。

- 及川議長 ありがとうございます。国際的な視野から御助言いただきました。ありがとうございます。Left behind という人が世界にいる。その存在を忘れてはいけないというメッセージがありました。同時に国内にも Left behind の方々がまだまだいらっしゃる

しゃいますので、両にらみで我々はやっていかなきゃいけないということでもあるか
と思います。

時間なので、最後に一言ずつ、手短によろしくお願いします。まず、佐藤委員から
お願いします。

- 佐藤委員 横浜の冊子、コンソーシアムでやっている学校現場での取組ですけれども、
10 ページだけ見ていただければなと思います。従来の ESD をテーマとして見るとい
うものではなくて、2012 年にユネスコが出しました ESD のレンズという。見直した
り、つなげたり、変わる地球、地域で、世界でという分かりやすい言葉を使いながら、
いろいろな問題を、持続不可能な問題をつなげていくという、こういうアプローチが
今後重要なのかなと思っています。テーマでつなぐだけではなくて、レンズを使って
いくという、そんなことも今後議論の中で話ができればなと思います。ありがとうご
ざいました。
- 及川議長 ありがとうございます。続いて、阿部委員お願いします。
- 阿部委員 今日は SDGs がテーマだったんですが、一つ申しておきたいんですけれど
も、SDGs の当初の原案の中には ESD は入ってなかったんですよ。それで、私ども、
ほかの NGO の方々と一緒になって、外務省の交渉官に何度も交渉しながら、日本から
ESD を入れ込むようにということで交渉してきた。ですから、その成果の一つだとい
うことを御確認いただきたいということです。

もう 1 点、ちょうど今、オリンピックで盛り上がっておりますが、2020 年のオリ
ンピック、4 つの理念が出されていますけど、その一つがサステナビリティですね。東
京都は小中高の副読本、非常に立派な副読本、100 ページぐらいのものを作っておら
れますが、残念ながらその中でもサステナビリティは 2 ページしかありません。一
方、現状では東京オリンピックのサステナビリティ化は非常に厳しいのではないかと
も言われていますので、ESD をオリンピックのレガシーにすべく取り組むべきだ
と思います。今日はこの後議論できませんが、この場で、皆さん方に是非 2020 年オリ
ンピックに向けて ESD をレガシーにするんだということ、それは SDGs の達成にも貢献
するんだということを、是非皆さん一緒にあちこちでおっしゃっていただけたらと思
っています。以上です。

- 及川議長 ありがとうございます。
最後に、手島委員お願いします。
- 手島委員 私は、この ESD 円卓会議が、この中で閉じられてはいけないと思いま
す。例えば SDGs の円卓会議、外務省がどんどん発信力を持って発信して、ピコ太郎
さんを推進大使としながら、今どんどん影響力を作っていますね。せっかくこれだけ
いろいろな知見が集まって、すばらしい考えがあるわけです。でも、これは ESD を推
進するということは、国民の理解が絶対必要です。なぜなら、保護者は受験産業から

ががが宣伝されて、従来の学力観の中に縛られている。その中で判断して、こういう教育が良いかな、なんてやっているわけです。でも、そうじゃないんだ。これからの社会では、こういう力が必要なんだということをきちっと発信していかない限り国民は変わらない。それがない限り、学校教育も社会教育もまだまだ変えていく力は弱いと思うんです。ですから、開かれた円卓会議の発信力というのをもっともっと作っていかなくちゃいけないなと私は思います。

以上です。

- 及川議長 ありがとうございます。皆様の大変多くの示唆に富んだ御意見を頂戴いたしました。3点、事務局に最後お願いします。

1点目は、国際的な部分で、GAP後のESDの推進ですね。コンサルテーションがあるということなのですが、是非今日の議論をそれに反映していただくということがこの円卓会議の一つの大きな機能であり、趣旨なのかなというふうに思いますので、よろしくをお願いします。

2点目としましては、議論の中でも何回か出た、国内的な施策としてESD、あるいはSDGsの達成の貢献に資するESDの推進ということで、環境省、文科省が、それぞれが事業展開をしております。コンソーシアムもあり、あるいはESD活動支援センターもあり、その他多くの取組があります。これらの国内的な施策にもここに来られた様々な知見、意見を是非反映していただく形で進めていただければというふうに思います。

最後には、今手島委員から開かれた円卓会議という言葉がありましたが、円卓会議に結集された知見なり、様々な提案を是非多くの方々に伝える、そういう努力もあわせて、環境省、文科省を中心とする関係省庁連絡会議にもよろしくお願ひしたいと思っております。

本日予定しておりました議題は以上で終了いたしました。特段の発言はございませんでしょうか。よろしいですか。

- 手島委員 今日の発言の資料を、改訂版を持ってきましたので、よかったらお持ちください。
- 及川議長 後で配付するそうです。では、最後に環境省の中井総合環境政策統括官より閉会の御挨拶をお願いしたいと思います。
- 中井総合環境政策統括官 御紹介いただきました環境省の総合政策統括官の中井でございます。本日の円卓会議におきましては、SDGsの策定を踏まえました各分野におけるESDの最近の取組状況などにつきまして情報を共有いただきまして、これらを踏まえて今後のESD推進方策の在り方等について御議論いただきました。委員の先生方におかれましては御多忙の折、多大なる御協力を賜りましたことをまずお礼申し上げます。

本日御報告させていただきましたように、環境省といたしましても持続可能な開発のための教育に関するグローバル・アクション・プランの後を見据えた取組を推進しているところございまして、その柱として多様な主体による分野・地域横断的な取組を推進するため、文部科学省と連携いたしまして、ESD 推進ネットワークを構築しているところでございます。

そして、今日、実は参考 2 と 3 というところに入れさせていただいているものがございます、今日遅参いたしましたのは、第 5 次環境基本計画、自民党の方で審議、了解を頂くというところをやってまいりましたけれども、おめくりいただきまして、閣議決定ベースで、時代認識、とがった認識をしようということでございます。おめくりいただいたところで、SDGs という国連の流れがあり、かつ、温暖化で申しますとパリ協定がある。21 世紀中に温室効果ガスが出ないような経済や社会、人類の活動の修正によって、ある種人類文明社会の転換期だと位置付けられるのは、そういう世界の潮流がある中で、そのことをきっちり閣議決定ベースでみんなで共有しようじゃないかと。そうすると、それをベースに何をするのかというところが、次の 4 ページのところ、持続可能というところを更に深めまして、環境・生命文明社会というような概念を今回出しております。地域におきましては地域循環共生圏という、都市や農村、都市部、そういうものがそれぞれが自立、分散しながら補い合うということでありまして、人間が地球環境の気候温暖化に代表される危機の中で、生命、生態系、自然の摂理に合った我々人類の地平を IT や AI や IoT も入れて、人類が獲得したハイテクなども使いながら新しい知恵を開くんだと、そういうところを高らかに閣議決定ベースで宣言いたします。こういうような時代状況をまず皆が共有するということで、この計画ではパートナーシップというところを非常に強調させていただいております、まさしくパートナーシップ、人づくり、問題意識を踏まえていろいろ協働するところ、まさしく ESD の出番だというふうに我々も思っております、是非御理解賜って、また更に私どもは汗を流してまいります、大きな国民喚起を図って、人づくりを進めてまいりたいと思います。

参考 3 といたしまして、実は、何はともあれ自然に触れるということが非常に欠落しているのはまずいというところがった認識を持っておりまして、養老先生にも出っ張っていただきまして、自然に飛び込みたくなるような読本も作ったということで、それをおひろめする場を設け、これを広げていきたいということでございます。是非御理解、これも 3 月 21 日にやるものにも御参画いただければというふうに思っております。

以上、いろいろ申しましたけれども、先生方から頂戴いたしました御意見につきまして、今後の ESD 推進の参考として、更に我々も頑張っていきたいと思っております。引き続き御指導、御鞭撻のほどよろしくお願いいたします。本日はどうもありがとうございます。

いました。

- 及川議長 ありがとうございます。以上で議事の部分は終了いたしました。
最後に事務局から事務連絡があるということで、よろしくお願いします。
- 鈴木国際統括官補佐 事務局でございます。こちらの会場の方からのお願いということで伝達させていただきますが、こちらの会場の外はたくさん打合せスペース等があるんですけども、会議の終了後は適度に速やかに御退館くださいというメッセージを頂いておりますので、傍聴の方も含めてよろしくお願いします。以上です。
- 及川議長 それでは、以上で本日の円卓会議を閉会いたします。皆様、御多忙の中、御出席いただきまして、大変ありがとうございました。

— 了 —